渡野辺秀雄　議員

質問　北斗市の小・中学校のいじめの実態について

教育長　いじめの認知件数は増加傾向にある

問　全国の国公私立の小・中・高校、特別支援学校が２０１９年度に認知したいじめの件数は、前年度比12・６％増の61万２千496件と過去最高だったとの新聞報道がありました。

道内においても12・３％増の２万４千41件と過去最多を更新したようです。

いじめの内容は「冷やかしや、からかい、悪口」が61・９％と一番多く、最近の傾向として、スマートフォンのネット上などを通じたいじめが広がっている実態も指摘されています。

いじめは、子どもの健全な成長の芽を摘む卑劣な行為であることは言うまでもありません。いじめが原因で不登校につながり、学力にも影響していきます。

今、このようなコロナ禍の中、教職員の皆さんも多忙となり、なかなか目が行き届かないところもあろうかとは思いますが、家庭と学校が力を合わせ、いじめをなくす努力をしなければならないと思っています。

そこで、２点についてお伺いします。

(1)北斗市の小・中学校のいじめの実態をお聞かせください。

(2)不登校の子どもたちの数と原因が分かればお聞かせください。

答（教育長）(1)いじめの実態についてですが、市内の小・中学校においては、いじめの実態を把握するため、全児童・生徒に対して、年２回アンケート調査を実施しており、令和元年度の結果では、小学校において123件、中学校では16件のいじめを認知しています。

また、いじめに関する意識調査も行っており、「いじめはどんな理由があってもいけない」と回答している児童・生徒は、全国平均を上回る90％以上いましたが、残念ながら本市においても、いじめの認知件数は増加傾向にあるのが現状です。

いじめの内容については、「冷やかしや、からかい、悪口」が本市においても最も多く、その他にも、スマートフォンなどのネット上でのいじめなども令和元年度に３件認知していますが、これら全てのいじめについて、全児童・生徒への指導を実施して解決している状況です。

(2)令和元年度の不登校の子どもの数は、小学生で12名、中学生で80名となり、その原因としては、集団生活になかなか適応できない、学業不振や将来への漠然とした不安、疾患など様々な要因が複合している場合が多く、本人や家庭内だけの問題ではなく社会的な問題として捉えています。

いじめ、不登校等の生徒指導上の諸課題の解決には、学校内での情報共有による組織的な対応の徹底はもちろん、家庭と学校が力を合わせることが重要であり、日ごろから学校の様々な情報を積極的に保護者や地域に発信することで、学校・家庭・地域が連携して社会全体でいじめの未然防止に取り組むことや不登校の児童生徒を受容する姿勢で共感的理解を深め、自己肯定感を高めることができる環境づくりをしていくことが大切であると考えています。

問　未来のある子どもたちの心を守り、心身を鍛えてあげることが私たちの役目だと思っており、そういった心掛けが一番大事ではないかと思います。

いじめや不登校は簡単に解決できる問題ではないが、教育委員会がリーダーシップをとって、学校はもちろんのこと、地域も巻き込んで解決に向けた取り組みはできないか。

答（教育長）最近、社会の考え方が若干変わってきて、学校に行かないことが悪いことではないというような風潮になってきています。

医師なども、無理に学校に行かせないというようなケースが増えてきています。

それは、学校に行くかどうかよりも、子どもが社会的、心理的に自立していくことが大事だということです。

学校に来られない子どもに対して、社会全体が大らかに見てあげることも大事ですし、教育委員会としては、自尊心をもって何か誇れるものを持てるような教育をこれから進めてまいりたいと考えています。

問　小・中学校の不登校の子ども数を学年別でお知らせください。

答（学校教育課長）小学校は、１年生１名、２年生１名、３年生１名、４年生１名、５年生４名、６年生４名で合計が12名となります。

中学校は、１年生17名、２年生29名、３年生34名で合計が80名となっています。

通学中の小学生たち